

万葉第一五歌の復権のために

福沢武一

中大兄の三山の歌

香具山は畝傍雄々しと 耳梨と相争ひき 神代よりかくにあるらし
古も然にあれこそ うつせみも嬌を争ふらしき (一一三)

反歌

香具山と耳梨山とあひし時立ちて見に來し印南国原 (一四)
渡津海乃豊旗雲爾伊理比沙之今夜乃月夜清明已曾 (一五)

右一首の歌、今案ふるに反歌に似ず。ただし、旧本この歌を以ちて反歌に載す。故に今なほこの次に載す。また紀にはく、天豊財重日足姫天皇の先の四年乙巳に天皇を立てて皇太子となすといへり。

一

一五歌の本文を紀州本で示した。その訓と解説を五味智英氏から借りる。

渡津海の豊旗雲に入日さし今夜の月夜まさやかにこそ

(口訳)海の上の大空に旗の如くたなびくうるはしい雲に入日がさして居る。今夜の月はさぞ澄みわたることであらう。

一首豊麗健康、陰影を宿さず、厚味ある颯爽さともいふべきものを具へた歌である。この期の代表作たるのみならず、我が

短歌史上に於いて忘るべからざる傑作と言ってよい。(同氏「古代和歌」昭26)
これは戦前に聞かれた異口同音の讃辞である。念のため斎藤茂吉氏からも引用する。

莊麗といふべき大きい自然と、それに参入した作者の気魄と、相融合して読者に迫って来るのであるが、如是莊大雄巖の歌調といふものは、遂に後代には跡を断った。(万葉秀歌) 昭13
五味氏は「入日さし」に次の注を加えている。

「入日さし」の中止法は弾力性に富む表現であつて、これを一説の如く「入日見し」として「今夜」の修飾としたのでは著しく平板な歌になるであらう。(同上書)

ところが、数年ならずして、同氏は「入日見し」を採っている。わたつみの豊旗雲に入日見し今夜の月夜さやかに照りこそ (高木・五味・大野三氏校註日本古典文学大系本万葉集)

同訓で、

海上に旗のようになびいている豊かな雲に、入日が射しているのを見た。今夜の月はさやかに照ってほしいものだ。(以下、

五味氏「万葉集講義」昭60

まず第一に、「入日見し」ですが、「入日さし」でなくて、や

はり古写本を比較すると、「見し」をとらざるを得ない。それから「こそ」が上に形容詞や形容動詞をもつてきてはまずいようだ。そうしたらどうするかというと、動詞の連用形について、そうして願望を表わしてそこで終わる。……こういうふうに読みますと、従来読まれていたよりも歌の格が小さくなって、落ちます。落ちるのはたいへん残念だけれども、理の当然、仕方がないというわけで、こういうふうに読んだ。

かつて一五歌は集中の絶唱だった。その壮大な情景は色あせ、哀れなほど下落した。それは「理の当然、仕方がない」と言っていられようか？

二

一五歌の理解が一番深いのは島本赤彦だ。それは古今独歩の断定説である。

赤彦と斎藤茂吉は盟友だった。赤彦は自説を発表して間もなく死んだ。その後三十年、茂吉は死ぬまで赤彦説の存在を知らなかった。推量説でない、願望説でない、第三の説を赤彦は声高に提唱した。それが聞こえないとはどうしたことだ。少々長いけれど引用する。^①

海上遙かに棚曳ける豊旗雲である。それに入日が刺してゐる。

これだけで、如何にも壮大雄偉の感が起る。四五句更にそれを受けて、「今夜の月夜清けくこそ」と言っている。「つくよ」は月夜であり、又、月のことでもある。「まさやけくこそ」は「清み明かくこそ」「清く照りこそ」など様々の訓みのあれど、小生は古泉千樫君の訓に従ったのである。この下二句、今宵の月夜は「清けくこそあれ」と断定してゐるのであって、上句の壮なる勢を受けて、大磐石の如く据わり得てゐるといふ感がある。

（万葉集の鑑賞及び其批評）大14

第三の説は、紛う方ない「断定説」だ。上三句は輝かしく、堂々たる実景である。下二句は、これまた喜び溢れている。「今夜の月夜はさやかなんだ」と、夜分の月明を先取りして、欣喜雀躍している。情と景と一つに溶け合つて、底抜けに明るい法悦境を現前している。かくてこの歌は最高に素晴らしい。

なおしばらく赤彦の言葉に耳を傾けよう。

一首の意は明瞭であらう。境は海浜である。海上遙かに豊旗雲が棚引き、それに夕日の光がさしてゐる。今夜の月夜の清明なること想ふべしと断定してゐるのであって、気宇の広闊雄大なること、多く比を見ないほどの歌である。（前掲書）

一歌の素晴らしさに讃嘆する。と共に、赤彦の明察に驚嘆する。

赤彦の眼だけが明いていた。その眼孔はだてに大きかったのではない。

三

赤彦説は一五歌を啓示してくれた。導かれ、励まされしている間に、気が付いていた。「入日さし」は中止法でなどない。これだ、月明を確信させる鍵は。一五歌を生んだ時・所・人を明かしてくれるのもこれだ。

以下、項目を立てて論を進めたい。

注① 赤彦説を知っていたら次のようには言わなかったはずだ。

結句を推量とするか、希望とするか、鑑賞者はこの二つの説を受納れて、相比較しつつ味ふことも亦可能である。（斎藤茂吉「万葉秀歌」）

「入日さし」——連用形の知られざる機能

一

第三句は、代匠記がイリヒサシと訓み、それが以後の定訓になった。それまでの訓はイリヒネシ。

イリヒサシといへるは古格にて、今ならばイリヒサシヌといひ切るべきを……。 (井上氏新考) 昭3

このサシは終止的中止。中止形。現在の情景を述べたもの。

(小学館日本古典文学全集本万葉集) 昭46

私はそうは思わない。

どうして明るい月夜に相違ないと考へたかといへば、入日の恐らく赤々とさした海の雲がくつきりと見えるからだ。(拙著

「一愛好家の万葉評釈鑑賞に関する覚書き」 昭23

「入日さし」までは「今夜の月夜」以下の理由づけというべきものだ。同じ連用形の類例を一、二挙げる。

大和恋ひいの寝らえぬに情なくこの渚の崎にたづ鳴くべしや

(七一 忍坂部乙磨)

「大和恋ひ」は中止などではない。それこそが原因で、結果として「いの寝らえぬ」ことになっている。

天地を歎きこひのみ幸くあらばまた還り見む滋賀の辛崎 (三二

四一)

「天地を歎きこひのみ」を「また還り見む」へ続けたら滑稽だ。ところが、次句「幸くあらば」へ因果的に連ねた注釈はありやなしや。^①

岩代の浜松が枝を引き結びまさきくあらばまた還り見む (一四

一 有馬皇子)

この「引き結び」を「まさきくあらば」へ連ねる注釈書は皆無。「まさきくあらば」を飛び越えて、「また還り見む」へ直結させている。「まさきくあらむ」とこそ「引き結び」もしたのに、ここでちゃん切ったりしたらおしまいだ。^②

以上の確認を得た後、主題歌へ立ちもどうう。事情はがらりと改まっている。「入日さし」は理由。その結果は、いやでも今夜は「清明」でなければならぬ。もはや「清明こそ」は推量や願望などではあり得ない。

二

私が主題歌に魅せられたのは戦時中のことだった。

夕焼けは翌日の晴天を約束してくれる。だったら、当夜の月明を確約しているはずだ。こうした考えは主題歌の「清明こそ」を願望にも、推量にも、とどまらせなかった。

どうして夕焼けは月明を約束するか？ これがのびきならぬ課題になった。幼児以来の体験だけでは足らず、文章の世界に探索が続いた。数年にして回答が十例に達した。その一、二をここに引く。

伊豆国西海岸の漁村古宇に宿りゐてあけくれ詠みすてたる

澄み来る秋のゆふ日に浮かび出でて入江向ひの草山は見ゆ (若

山牧水「黒松」)

草山がくつきり見えた。空気が澄み切っていたからだ。海の旗雲が豊麗だったのも、空気が澄んでいた。その二、三時間後の月明は疑う余地がない。

強い秋の雨が一夜ざあざあ降った。次の日には空は些かの微粒子も止めないといったやうに凄じ程晴れて、山も滅切り近くなつてゐた。しつとりと落着いた空気を透して、日光が妙に

肌へもみ込むやうに暖かで且つ暑かった。(長塚節「土」)

ここで赤彦の言表を再度引用せずにはいられない。

今夜の月夜は「清明まさやけくこそあれ」と断定してゐるのであつて、上句の壮んな勢を受けて、大磐石の如く据り得てゐる……。

(前掲書)

ここにあるのは単なる写生ではない。いかがわしい混濁を交えない。喜び溢れている。景と情と、一枚に躍っている。至美・至幸の境だ。これを手放すということはない。^③

三

主題歌の場合、横雲に夕陽があたり、鮮やかに夕焼けしていたはず。それというのも、あくまでも空気の澄んだ秋の日暮れ時だった。さて、当夜の月明を約束している表現は、それは三句まで。その焦点は「入日さし」だ。それを最初に指摘したのは久松潜一先生であつた。現代語訳日本古典文学全集に、

海に旗のようになびいている雲に入日がさしているから今宵の月夜はさやかであろう。(同氏訳万葉集) 昭31

「入日がさしているから」の正解に驚いた。その本文を見直して、二度びっくりする。それは、

わたつみの豊旗雲に入日見し今夜の月夜清明こそ

これだったら、「入日を見た」云々と訳して当然だ。その後出版になった講談社学術文庫本によると、

……入日さし今夜の月夜清明すみあかくこそ

入日がさしているのです、今夜の月夜はすんで明るいことであらう。(同氏万葉秀歌) 昭51

「清明こそ」は別として、まさに「入日さし」が正解されている。

連用形には文を中止する機能がある。それとほとんど正反対に、原因・理由に機能する面がある。これは前件を受け、直ちに結果を導く。そのとき前件と後件は中止しては困る。二つは密接に連ならねばならぬ。そのことを久松先生はご存じなかったらしい。一四一歌の次の訳文に、その気配がない。

磐代の浜の松の枝を結んで、輪になったのが一回りしてかえってくるように無事であつたなら、また帰ってきて見よう。(同上書)

原因・理由に機能する連用形は、上掲のサシ・ムスビに限らない。助動詞の連用形も別ではない。次の文形の時、当の機能がしばしば活用される。それを通覧することで当面の確認に資し、あわせて後の行文の予備に供したい。

四

- 〈1〉 木綿かけて祭るみもろの神さびていむにはあらず人目多みこそ
(二二七七)
- 〈2〉 息のをに思へどわれは人目多みこそ 吹く風にあらばしばしば逢ふべきものを(二三五九)
- 〈3〉 小里なる花橘をひきよぢて折らむとすれどうら若みこそ(三五七四)
- 〈4〉 言問はぬ木すら春さき秋づけばもみち散らくは常をなみこそ(四一六一)
- 〈5〉 栲縄の長き命を欲りしくは絶えずて人を見まく欲りこそ(七〇四)
- 〈6〉 草枕旅行く君を荒津まで送りそ来ぬる飽き足らにこそ(三二一六)

〈7〉この丘の小牡鹿ふみ起こしうかねらひかもかもすらく君故にこそ（一五七六）

〈8〉時つ風吹飯の浜に出でゐつつあがふ命は妹が為こそ（三二〇一）
うつたへに籬の姿見まくほり行かむといへや君を見にこそ（七七八）

沢瀉氏は上記九歌を例に挙げ、さて言われる。

大野氏は〈3〉「うら若みこそ」を「うら若いから折らないのだ」、
〈7〉「君故にこそ」を「あなたが原因でだ」、〈9〉「君を見にこそ」を「君を見たいからだ」と訳され、「すべて、…が原因であるといふことを示す場合に限られてゐる」と、一律に処理して片付けてをられるが、右の訳語なども少しこまかい心遣いが必要なのではないかと思ふが、どうであらうか。（同氏注釈一五歌注）
〈1〉〈2〉〈3〉の「…み」は動詞の連用形に準ずべきもので、原因・理由の「…から」でいい。〈7〉「故に」・〈8〉「ため」の原因・目的は共通する面を否定しきれない。ただし、〈9〉「見にこそ」は「見に行くのだ」であつて、「見たいから」はいささか意味を取りすぎている。

次に沢瀉氏の説明が続く。

〈6〉「飽不足社」は、大野氏は引用されず、花田氏はアキタラズ、森本氏はアキタラネと訓まれてゐるが、これは「飽足あきたらる袖振る見えつ」（二一〇〇九）の例と同じく、アキタラニと訓むべきである。又、〈5〉「欲見社」を次田・森本・大野の諸氏いづれもミマクホレと訓まれてゐるが、佐伯氏（「万葉集講座」品詞概説）や森本君（国語国文一六卷二号「上代係助辞論」）が云はれてゐるやうに、ミマクホリと訓むべきものである。従つて、「飽き足らねばこそ」「見まく欲ればこそ」の如く、はっきりした原因を示すものでなくて、原因の意をうちにこめてはゐるが、「飽き足

らなくて」「見たく願つて」といふ程の意である。（同上書）

論旨が軟化に向かつてゐるのは残念だ。補正しつつ総括したい。

〈1〉〈4〉ミは、本来マ行動詞の連用形から出たものである……、
〈6〉ニもまた打消助動詞の連用形であり、〈5〉ホリまた四段動詞の連用形である。（沢瀉氏同上書）

いずれも、いずれも、はっきりとした原因・理由を示している。それは連用形の一機能だ。その働きは、いわゆるミ語法を下回るものではない。

五

古い話になるが、伊藤左千夫が次のように提言した。

入日の実景から其の夜の月明が想知されたので殊に悦んで詠まれた歌に相違ない。（以下、同氏新釈一五歌注）

この前提は正しい。最後に来る次の評言は素晴らしい。

心も晴れるやうな、誠に感じのよい歌である。愉快な情もよく顯れてゐる。

ところが、途中の論証がまずかった。「入日さし」を過去にとったことが致命的だった。

語格の上から云へば、「入日さす」でなければならぬ。「入日さし」では此の場合現在の意義にとれない。さらば例の誤写か何かであらう。

結局、次のような訓を選ぶことになった。

わたつみの豊旗雲に入日さす今夜の月夜清く照るこそ
「入日さし」は、今現に「入日がさしているのだ」だ。だからこそ、必然的に「清明こそあれ」（さやかなのだ）が結果する。単純な未来ではない。現在において先取りされた未来、現在の一部といつてい

い。

同じことが一四一歌についても言える。中西進氏が次のように訳注を与えた。(以下、引用は講談社文庫「万葉集」中西氏註解)

磐代の浜松の枝を結びあわせて無事を祈るが、もし命あつて帰路に通ることがあれば、また見られるだろうなあ。

「引き結び」を通解どおり中止としている。奇異なのは文末。

ムは推量。意志ととると「あらば」と合わぬ。

いかにも、「あらば」に合わせようとすれば、「かえり見よう」と意志するムと合わない。しかし、「かえり見る」のは未来にしても、今現に「ひき結び」一つ、「またかへり見む」と意志している。単なる未来や推量ではない。助命を松に願って結んでいる。願いのかなえられた暁の精一杯の感謝を誓ったのが「かへり見む」なのだ。一歌はせつばづまった有馬皇子の肉声そのものだ。

注① その数少ない注釈は、

鴻巣氏全釈・総釈斎藤清衛氏解・窪田空穂氏評釈

② 拙著「万葉省察」第二で詳しく解説した。なお本稿でも下文で関説する。

③ 次のような見解を「混濁」に含めた。近時、この気配の強まっていることを知りつつ、一言するだけにとどめる。

ワタツミの語に依って表示せられる海は、神秘不可測の性質を強く存してゐるのが本義である。(武田氏全注釈)

「序詞句格補説」^① 批判

森重敏氏に標題の論考がある。その副題は、

「わたつみの豊旗雲に入日さし」

氏は連用形で終わる序詞を中心に論じている。その例歌を逐次検討して行き、最後に一五歌の「入日さし」に及ぶ算段である。

一

1 明日香川水ゆき増さりいや日けに恋の増さらばありかつましじ
(二七〇二)

一、二句は序。何に対する序か、説が区々である。最近の注釈書によれば。

a 「いや日けに」 沢瀉氏注釈・集成青木氏解

b 「いや日けに恋の増さる」 森重氏解・小学館本

c 「恋の増さらば」 大系本・全注釈(増されば)

d 「増さらば」 総釈春日氏解・佐々木氏評釈

b の釈例を引く。

飛鳥川の水の流れが増えるように、日増しに恋がつのつたらば、生きていられないだろう。(小学館本)

「増えるように」は「増さり」の訳になっていない。その点では正答が一つもない。

2 風吹かぬ浦に浪立無き名をも吾は負へるか逢ふとはなしに(二七二六)

一、二句は序。「浪立」の訓がナミタチ・ナミタツの二つに分かれる。前者は「負ふ」へ、後者は「なき名」へ連なっていく。従来タツがとられた。森重氏はタチを選び、序句が主想部へ比喩的に働くと正解した。同解の訳文を引く。

風の吹かぬ浦に波が立つように、あらぬ噂をわたしは立てられたことだ、逢ったわけでもなくて。(小学館本)

「浪立ち」が「波が立つように」を意味しようとは思えない。私解する。——「浪立ち」は「波が立つので」。1の「水行き増さり」も「水が行き増さるので」でなければならぬ。

念のため、前後の接続を示す。

1 A:流れて行くにつれて増水するので、B日増しに水かさが増さるように、C恋が日増しに増さったならば:

2 A:浦に波が立つので、B浮き名を負わされるように、C私もありもしない噂をされることよ:

A(序)からC(主想部)に到る間にB(被序)が仲介をなしている。BとCの一部とが懸詞的に重なる。そこに初めて「ように」といった係辞が成立する。

二

イ 丹波道の大江の山の真玉葛絶えむの心わが思はなくに (三〇

七一)

ロ 大崎の有磯の渡りはふ葛の行方をなみや恋ひ渡りなむ (三〇

七二)

イロの序部の通解は、イ:玉葛のように、ロ:はう葛のように。序はいずれも比喩である。その部分に「ように」の接辞を補うことは当然とはいえず、12の連用形、イの「葛」、ロの「葛の」の相違を無視し、一様に「ように」を補うことは不可解だ。

森重氏の見解は次のようである。

ロの比喩部は、「延^はふ」が「葛」の連体格に立ってをり、意味上クズガハフといふ句にも成り得べき力価を含むことのあらはな形をとってゐる。すなはち、ロは、イの類と12の類との両方に通ずるのである……。

私はそうは思わない。イロは、「の」の有無にかかわらず、主格に立っている。12はロの類から転換したものではなくて、もともと連用修飾句として独立している。もしロを「葛のはひ」(葛がはって)と受けとるならば、原意と大差はない。12並に「葛のはひ」(葛がはうので)としたならば、原意から大きくずれてしまう。

要するに、ロと12は、もともと転換できないものなのだ。

3 秋の田の穂の上に霧らふ朝霞何時^{いつ}辺の方にわが恋やまむ (八八 倭姫)

三句までが序。連体格の「霧らふ」を含む。そこで、次のように転換できると森重氏はいう。

…穂の上に朝霞きらひ…

これも12並に「霧らふので」の意ではない。つまり、転換は無理なのだ。3の歌意は、

秋の田の穂の上にかかってゐる朝霧のやうな胸中、その霧はいつか、片方に晴れて行くが、さ霧のまん中に閉ぢられたやうな私の恋心はいつやむ事であらうか。(沢瀉氏注釈)

「朝霧のやうな胸中」はまずい。次のように改めたい。

…朝霧が何時か、よそに(周辺に)晴れて行くように、何時になったら私の恋心は(胸から)よそへなくなつて行くことであらうか。

三

ここで森重氏引用の連用形以外の序詞に一渡りする。

4 木綿畳田上の山の狭名葛ありさりてしも今ならずとも (三〇七

三)

「さな葛」までが序。「ありさりて」にかかると通解されている。

むしろ、「ありさりてしも逢はむ」の省略部「逢はむ」を重視したい。
全文は、

A: さな葛が Bやがては逢うように、C 私たちもやがては
逢いましょう…

5 さを鹿の入野の薄初尾花何時しか妹が手を枕かむ (二二七七)

「初尾花」までが序。以下への続き方は、

a 新枕せむ 代匠記・全釈・朝日全書

b 妹が手枕をしたい 古義・総釈安藤氏解

c 出づ↓いつ (何時) 井上氏新考・土屋氏私注

d 早く咲けばいい 大系本・沢瀉氏注釈

e ういういしい娘のたとえ 小学館本・中西氏講談社文庫本・

集成本清水氏解・全注安蘇氏解

4 に準じて、「何時しか」の次へ「初尾花」にかかわる言葉が補わ
るべきである。それにふさわしいのはd。全文は、

A: 初尾花が B 早く咲けばいいというように、C 早く妹の…

6 真野の浦の与膳の継橋情ゆも思へや妹が夢にし見ゆる (四九〇)

吹黄刀自

「継橋」までが序。「継ぎ」と明言したため、被序を必要としな
くなった。敢えて補えば、

A: 継橋が B 続いているように、C あなたが絶えず夢に見え
るのは、心から思っているからだろうか。

7 磐代の野中に立てる結び松情も解けず古思ほゆ (一四四 長意
吉麿)

この「結び松」こそ喚体である。と同時に序・被序を構成してい
る。

A: 結び松よ、B お前が解けないように、C 私の心も解けない

で…:

8 武蔵野の草はもろむき かもかくも君がまにまに吾は寄りにし
を (三三七七)

森重氏は「もろむき」を動詞「もろ向く」の連用形と考えた。そ
れは無理であろう。一、二句は独立句で、例示と見たい。すると、

A 武蔵野の草は諸向きです。B それと同じように、C 私はあな
たのおぼし召しのままに身を寄せたのですよ。

四

連用形で終わる序詞は数すくない。その一つとして次のものが挙
げられている。

9 河上のゆつ磐群に草むさず常にもがもな常処女にて (二二
黄刀自)

「草むさず」の続きが次のようにとられている。

a 草が生えてゐない。変らずにゐたいもの… (窪田氏評釈) 中

西氏講談社文庫本、同解

b 草の生えることがなく、奇麗で、滑らかである。そのやうに

お変りにならないで… (斎藤氏秀歌) 折口氏口訳・山田氏講
義、同趣

c 草も生えずみづみづしいやうに、いつまでも変らずに… (沢
瀉氏注釈) 大系本・小学館本・集成本清水氏解、同趣

d 草が生えていないであるやうに、変ることなく… (武田氏
全注釈) 土屋氏私注・全注伊藤氏解、同趣

a b は「草むさず」を終止句とした。そのため比喻が盛り上がり
ない。c d の三句までは「常に」へ修飾的に連ね、比喻を安易な
ものにしてしまった。「生えないので」を選ぶべきだ。

A：草が生えないので、B 変わらないでいるように、C 常処女として変らずにあつてほしいことよ。

「草むさず」のズは連用形。これは中止でもなければ、小休止でもない。切っても切れない密接さで下文に連なっている。

類例を一つに限って追加する。

ハ 玉くしげ覆ふを安みあけて往なば君が名はあれど我が名し惜

しも（九三 鏡王女）

「安み」までが序。全文は、

A：覆うのは簡単なので、B ふたを開けるように、C 夜が明けてからお帰りになったならば：

「安み」は、9 の「草むさず」、1 の「増さり」、2 の「浪立ち」共々、原因・理由を意味している。それは訳文の上にも「：ので」と現わすべきものののだ。

念のため、以上の例歌を総括する。

序詞は比喩である。時に主格として（イロ 3 4 5）、時に連用修飾格として（1 2 9 ハ）、下文へ連なっていく。その連なり方は、A ↓ B（ように）↓ C、の構成に従う。なお、4 5 6 には省略があった。7 8 は独立句で、それを受けて序歌を構成している。

五

一五歌・一四一歌の三句までは序ではない。森重氏はそれと明言しないけれど、序句並に、序句以上に扱っている。その点の当否をこれから調べることになる。

磐代の浜松が枝を引き結びま辛くあらば又還り見む（一四一）
「引き結び」は連用形中止だと通解されている。次のように述べる森重氏も例外ではない。

松が枝を引結ぶことが直ちに、再び帰り見ることを引き出したのではあるが、それが事実として出なかったところに皇子の悲しさがあつた。それは、その下句を願望の意味に解した場合の清明の歌と同程度のものではかない。

森重氏は「引き結び」を理解していない。いかに切実に、神かけて祈っても、「ま辛くある」ことは保証の限りではない。「ま辛くあらば」というよりなかった。願いのかなった暁には、感謝を捧げようと、かたく誓っている悲哀の皇子だ。

わたつみの豊旗雲に入日さし今夜の月夜清明こそ（一五）
この上句・下句の関係を森重氏は次のように述べる。

上句の光景は作者にとって、とりもなほさず下句の事実を直観せしめる象徴であつたのである。

連用形がなぜ象徴に機能するか？ 森重氏の所説に聞こう。

比喩が比喩として優れてゐるといふことは、主想部と対比せられるその理知的な開きを狭めて、両者一体たるに近くなつてゐるといふことである。換言すれば、その極限においては比喩部が主想部の象徴となつてゐるといふことである。比喩部の表現がおのづから主想部を暗示し誘導し来たり、しかも両者の対立が即一的であるといふことである。比喩部の方が主位に立つに至り得るはずである。

このような例歌として 3 7 が挙げられ、

比喩部が、単なる比喩でなく象徴的とも見られるのも、それが現実囑目のものから取り来つたものであることと深く関係する。現実が象徴として、それによつて象徴せられるものを即一的・一体的に引き出すのである。

3 7 の例歌とても、氏の所論に遠く及ばないことを悲しむ。要は、

序詞は比喩ではあっても、「主想分を誘導し、主位に立つ」ごときものではない。たまたま一五歌が主位に立ったのは、序歌でなかったのだ。

森重氏は一五歌の成生を解析する。

上句を終る連用形において上句の内容たる入日の光景が真に自覚せられ、自覚せられることがすなはちまたおのづから一つの直観として、事実としての下句を指向し、現成したのである。森重氏の熱っぽい物言いが続く。

この歌が傑作と称せられるのは、単に内容の叙景的雄大豊麗等々にあるのでは無論ない。上句における自然への観入の深さ、下句におけるそれを裏付ける深みからの現成、上句から下句へのもっとも具体的な生命のあらはれとしての飛躍的な移り、さらには上句連用形から下句の「こそ」への響き、さういふところにあるのである。

要するに、森重氏の指摘したかったのは何なのか？

私は、素晴らしい景観と、作者の深い感動を挙げたい。情と景のまっぴら融和が傑作を生んだ。

そして、この結晶の素因は「入日さし」のサシだった。

注① この論考は「万葉」創刊号（昭和二六）所収。

② 「葛のはひ」（葛がはって）の語釈は、七〇四「見まくほり」・三二一
一六「飽き足らに」の沢瀉氏解に等しい。

「入日見し」批判

「入日見し」の提唱は武田氏だった。

一番古い写本に「弥」とあるにしても、「見し」は語義・語感ともに異常過ぎる。改めて「入日見し」に至る過程が気になる。

(1) ……入日さし……清く明りこそ

入日が射して今夜の月夜は清く明るくあつて欲しいことだ。

「入日さし」中止形であるから、やはり下のコソの願望の意がここにもかかってくる。入日さしてほしい、の意である。

（後記）この歌は、初二三句の叙述がいかに海上の夕陽を写した壮大な景であるやうに見えながら、語法上の説明がつかねる点があつて、一首の生命を完全に發揮することが出来ないのは残念である。（以上、武田氏新解）昭18

「一首の生命を完全に發揮する」ためには、まず「清明こそ」を願望説から開放すべきであつた。

(2) ……入日見し……清く明りこそ

入日のさすのを見た、今夜の月は明るくあつてほしいことだ。

ミシは、元暦校本に「弥之」、細井本に「沙之」、神田本に「佐之」、西本願寺本等に「弥之」とある。今、元暦校本に依る。（全訳万葉集）昭18

前著は願望説で、「入日さし」から夕焼けの壮大な実景は消えていた。実感を伴わない点、すでに「入日見し」と大差はなかった。

本書は、序文によれば、門弟たちが万葉水無会を結成し、師の勧めに従つて万葉全巻の口語訳を当面の研究目的とした。会員が九人で、原稿の整理には今井福治郎・賀古明の二氏が当たった。

賀古氏が後年、同訓・同釈して、次のようにいつている。

今は、用字の伝来の性格よりして「弥之」によるべきとされている武田祐吉博士の説による。(同氏万葉集の探求) 昭32

二

以上は戦時中。戦後まもなく、武田氏の全注釈が出版された。まず一五歌の古写本が比較検討されている。

仙覚は祢之を採用して、「ネシといふは、やはらぐと云こと……」と釈してゐるが、その説は無理である……。弥之・佐之(または沙之)は、いづれにしても意味は通ずるであらう。弥之に依る時は「見し」の義とすべく、そのシは時の助動詞の連体形、佐之に依る時は、「射し」の義とすべく、動詞「射す」の中止形と見るべきである。而して、そのいづれに依るべきかは、(一)伝来の性格、(二)一首全体の調和、の二点から観察しなければならぬ。そこで伝来の性格としては、元暦本と類聚古集とが一致して弥之としてゐることは、相当尊重せられねばならない。これに対して神田本が佐之、細井本が沙之に作って、よし訓は同一でも字面がそれぞれに相違する孤立的の伝来であることは、伝来の性格に於いて弥之に譲るものとすべきである。(全注釈) 昭23

武田氏は(一)の判定に従って「入日見し」についた。結句は、スミアカリコソ。次の訳文を与えた。

海上の大きな横雲に入日のさしてゐるのを見た今夜の月は、澄み明るくあつて欲しいことだ。

これで(二)の「一首全体の調和」がとれたのだろうか？

夕焼けの実景は消失した。間もない月明は期して待つべきである。いまさら願望など不必要のはずだ。一首全体の調和など皆無だ。武

田氏自身の評語にいわく、

五句の訓が難点ではあるが、それは歌自身の欠点ではない。元来、名歌と考へられるだけに、何とかして明解を得たいものである。(全注釈)

欠陥は五句の願望にある。三句の「見し」にある。次のように批判されて当然だ。

作者が横雲に夕日を見たと解すれば、意味は分かるが、歌としてはサシの直截なるに及ばない。(土屋氏私注) 昭24

三

沢瀉氏からも立ち入った武田説批判が提出された。

この訓と釈は、遺憾ながら、やはり承服する事が出来ない。その解釈では入日は眼前のものではなくなり、……歌の生命を無視したものとなるであらう。考察は出直さねばならぬ。

改めて元暦本と類聚古集とを検するに、原文にはなる程、「弥」とあるが、ここに注意すべき事は、両本共に添へられたかな書には「いりひさし」とある事である。紀州本も訓は同様である。……ともかく現存中の最古本三本が一致してイリヒサシと訓んでゐるのみならず、袖中抄や綺語抄や夫木抄に引用せられたものも同様といふ事は、注意しなければならぬ。

即ち、「弥」とありながらミシの訓はなく、「祢之」とある本にネシといふ訓は見えるが、それ以外の古訓がすべてサシに一致してゐる事を思ふ時、この古訓こそ原本の正しい訓を伝へたものであつて、本文の方が誤ってしまったと考へるべきではなからうか。(沢瀉氏「豊旗雲に入日さし」) 昭27^①

その原字を沢瀉氏は擬定した、佐でも、沙でもなく、「紗」であつ

たろう、と。流布本や後の写本の「沙」が古写本で「紗」の場合が多いためであった。誤写を重ねた諸本の用字を氏は次の系統図にまとめた。



四

沢瀉説を飛び越えて、武田説を継承したのは大野氏だった。氏は文末のソソの検討から出発し、願望説しないと結論した。その時、「入日見」はあつらえ向きだった。武田氏の論旨に従った後、次の補注が追記されている。

この歌の本文についてはなほ考へれば考へるべき問題がある。それは、仙覚以前の次点本の本文が、一致して「伊理比弥之」でありながら、その訓は、いづれもイリヒサシであることである。それは何故かといふに、問題の「弥」の字は、弓扁の字であるから、弓扁は毛筆で書く場合にはシ（サンズイ）のやうになることがある。また、旁の尔は、最初の二画を小さく書き、最後の一画を左下へ、つづけ書きにすると少といふ字形になる。これによれば弥の字は沙の字へと誤ることがあり得る。従って、次点本の一つに、伊理比沙之といふ本文があつたのであらうと推測することも出来る。原形に沙とあつたものを後に弥に誤るといふことも、もしかするとあり得なくもないが、その可能性は少ないやうに思はれる。（日本古典文法⁽⁸⁾）

察するに、これは沢瀉説を最小限に認めた言辭であつた。ところが、ほとんど同時に発表された岩波古典大系本の論旨は全面的な否

定に出た。いわく、

現存する本文に重きを置くならば、元暦校本などの「伊理比弥之」に従うべく、その訓は「入日見」とならざるを得ないであらう。またそれによつて、一首は首尾一貫した意味を表現することが出来る。文字及び語法の研究からは、右のような結論にならざるを得ない。（大系（一）補注）昭32

強弁のきらいがある。「伊理比沙之」の本文に直ちに從うのではなくて、検討を尽くした上で從う途がないとは限らない。また、「入日見し」によつて「一首は首尾一貫した意味を表現することが出来る」とはいえ、武田氏の自己批判にもあつた通り、十分なものでない。実景を離れ、願望一点張りに一貫しても、それは誉めたことではない。

五

武田・大野説は俄然支持を得た。その中であつて、稲岡氏の発言が特に手厳しい。⁽⁹⁾

沢瀉氏の本文批判に重要な役目を果たしたのは、古写本に付せられた古訓である。元暦本・類聚古集は、本文は「弥之」なのに、訓がサシであつた。その点を指摘し、稲岡氏は次のように論証する。

古写本の訓による本文復元の可能性は佐竹昭広氏（大成第一巻）などによつて既に述べられているように、ある場合にきわめて高く認められることであるが、それが方法として常に優先するわけではないこともまた明らかなように思われる。元暦本の訓そのものが、しばしば本文の文字を無視して恣意的につけられている例を含むと覚しいことは、たとえば巻一で、

草乎茹核（一一）↓くさをかれかし

尔保敵類妹乎（二二）↓にはへるいもか

伊良虞能嶋之（二四）↓いらこのしまに

などによっても知られる。：そうしたものと同様に「入日さし」も、なかば恣意的に、筆者などになじみやすいようにつけられた訓が、同時代あるいは後代の人々に、原文よりも受け入れやすかったのではなからうかという疑いも無いわけではない。つまり、古写本の付訓や諸歌集引用の万葉歌から、本文復原が可能なのは、本文に明らかな誤りの認められる場合なのであり、「弥之」の場合、「弥」を否とする根拠が鑑賞評価の観点にのみ存する限り、古訓は存分にその正当性を主張し得ないという反論が、十分予想されるのである。（稲岡氏「清明己曾のよみ方」^⑤）引用が長引いて恐縮する。が、批判点を是非明らかにして置きたかった。

稲岡氏は言われる、——「弥」を否とする根拠が鑑賞評価の観点にのみ存する限り、古訓は存分にその正当性を主張し得ない、云々と。たとえ存分でなくても、一五歌の古訓は、かなり、その正当性を主張し得はしないだろうか？ なぜなら、「入日見し」の訓はあまりに、あまりにも拙劣である。それが万葉原作だったとは思えない。思えないのは私たち現代人だけではない。一五歌の古訓者、夫木抄等の編者たちがそうである。それらの人々が恣意だったのでは恐らくない。「入日見し」こそ恣意の所産だった可能性がある。どっちの恣意の方がゆるし難いだろうか？

六

古訓による本文復原の可能性に関して、稲岡氏が言われた。

ある場合にきわめて高く認められることである……。

そのある場合に期待したい。また、

元暦本の訓そのものが、しばしば本文の文字を無視して恣意的につけられている例を含むと覚しい……。

けれど、

「入日さし」も恣意的なもの

と決め付けるのは早計である。元暦本その他の古訓に信用すべきものが皆無だったわけではない。むしろ「入日さし」の可能性は多分にある。その証言を佐竹氏の前掲書から借用しよう。

うち日さす宮路を行くにわが裳は破れぬ 玉の緒の念委家にあ
らましを（二二八〇）

「委」のままでは訓めない。元・古・紀の古訓「おもひみだれて」によって「念妄」を復原したのは佐竹氏だった。

向つ峯に立てる桃の木成らむかと人そ耳言為汝が心ゆめ（二三

五六）

「耳言為」元・神・類が「ささめく」の訓。佐竹氏は「為」を「焉」の誤字とし、それを文末の不読文字と正解した。

引用歌の場合は、

今造る斑の衣面就われに思ほゆいまだ着ねども（二二九六）

古訓、面就（めにつきて）。夫木抄に「おもかげに」とあり、面影（おもかげに）の誤字・誤訓。

：後も逢はむと 慰むる情を持ちて 三袖もち床うち払ひ：
（三二八〇）

通訓、三袖（みそで）。二手（まで）・二梶（まかぢ）に準じ、「二袖」（みそで）の誤字・誤訓が認定された。

以上、佐竹氏の創見にかかる若干を引用した。いずれも定説とすべきものである。古写本の古訓、夫木抄等々の引用歌、とって万葉

本文の復原に資すべき例証である。

注① 「万葉古径」(三)所収

② 「国文学―解釈と鑑賞」連載中の昭和三十一年一月号

③ 武田・大野説の陣営を第五句の訓別に列举する。

スミアカリコソ 武田氏(全注釈・創元社講座本)・賀古明氏「万

葉集の探求」・山岸徳平氏研究社学生文庫本

サヤニテリコソ 大系・稲岡氏「鑑賞、日本の古典」本・五味氏万

葉集講義・木俣氏ポプラ社古典文学全集本

サヤニアケコソ 伊丹末雄氏難訓考

④ 佐竹氏「本文批評の方法と課題」(大成一一巻所収論文)

⑤ 「日本文学の争点」(一)上代篇、所収

「清明己曾」のコソ

一

文末のコソに二種類が知られていた。1 願望と、2 推量と。用例で具体的に示す。

1 清明こそ。(さやかに照ってくれよ)

きよめてり

2 清明こそ(あらめ)。(さやかであるだろう)

まさやけく

1 のコソは言い切り。2 は「あらめ」が下略。一首の歌意として2の方がふさわしい。ただし、用例に欠け、長年の課題になっていた。この問題に正面から取組んだのは斎藤茂吉氏だった。集中から次の例歌を摘出した。

- 〈1〉〈2〉人目多みこそ(一三七七・三三五九)、〈3〉うら若みこそ(三三七四)、〈5〉見まく欲れこそ(七〇四)、〈6〉飽き足らねこそ(三三七四)。

二一六、〈9〉君を見にこそ(七七八)①

これらは係助詞で、下略が認められる。

雅澄は「云残したるコソ」と称し、「君故にこそアレ」、「人目多みこそアハズアレ」、「君を見にこそユカメ」……といふ具合に補充して解して居り、橘守部の「てにをは童訓」にもさう論じてゐる。(斎藤氏「中大兄三山歌評釈」)②

斎藤氏の結論にいわく、

願望のコソでないものが實際的に存在し、また、さういふコソで下略の場合もあり得ることが証明出来、従って真淵のアキラケコソに従ふ時に、コソの下にアラメが略されたとするのが道理だったといふことが分かればそれでいいのである。(同上書)

この後を受けて沢瀉氏が検討を重ね、次の例歌を追加した。

- 〈4〉常をなみこそ(四一六一)、〈7〉君故にこそ(二五七六)、〈8〉妹が為こそ(三二〇二)③

これらの例証によって沢瀉氏も推量説を守った。その際、結句に次の新訓を提唱した。④

…こよひの月夜まさやかにこそ(あらめ)

二

斎藤・沢瀉両氏によって問題が解釈したわけではない。むしろ批判を募らせ、やがて戦後に大野氏の推量説論駁として現れた。その主旨を要約すれば次のようである。⑤

- (1) コソが形容詞の連用形を受けた例は奈良時代にはない。
(2) コソが形容動詞の連用形を受けた例は次の一つに過ぎない。

三島江の入江の薦をかりにこそ吾をば君は思ひたりけれ
(二七六六)

これも「刈りに」と「仮りに」の懸詞として現れているに過ぎない。このように例が極めて少ないのは、動詞の連用形を承けるコソという語が奈良時代にあつて、願望を表現していたので、それと混同することを避けるためであつたと思われる。……従つて、奈良時代には、その例がないと見るべきである。

大野氏の指摘が続く。

(3) 奈良時代にコソで集結する歌は……八首で、みな……ダカラデアルという理由・原因を示す場合に限られている。「今夜の月が清かに照り渡るであろう」というような、事を未来にかけていう場合にコソで終止する例は三代集に至つても一例もない。これら(1)(2)(3)の理由によつて、アキラケクコソ・マサヤカニコソの訓に従うことが出来ない。(大系一五歌補注)^⑥

大野氏の到達した訓義は、

…入日見し今夜の月夜清に照りこそ

大海の豊旗雲に入日の射すのを見た今夜は、月もさやかに照つて欲しいものである。(同上)

結論の出たところで、も一度大野氏の自説自賛を引用する。

もし現存する本文に重きを置くならば、元暦校本などの「伊理比弥之」に従うべく、その訓は「入日見し」とならざるを得ないであろう。またそれによつて、一首は首尾一貫した意味を表現することが出来る。(前掲書)

先にこの説を難じた。素晴らしい夕焼けの直後、「今夜は月明であつてくれ」と願うことはあるまい、と。この時、ただ一つ、花田説に従うべきだろうか？

晴れるとも、荒れるとも見極めのつかない不安な天候であつたであらう。だから次の句は、「どうぞ晴れて、今夜の月は清らかに照つて呉れよかし」との願望となる。それが自然と思ふのである。(同氏万葉集私解)

これを裏付ける体験を花田氏は語っている。

大正二年の秋の十月であつた。私は鹿兒島から都城に行くべく汽車中の人となつて霧島の裾を迂回しつつあつた。そのとき霧島の山頂から斜めに天を横切つた素晴らしい長い大きな旗雲が凄じいまでに夕焼けしたのを見た。霧島の山頂から天半に棚引いた壮大なる旗雲が、真つ赤に焼けた凄惨なる光景は、それは美しいとか、晴れる希望を起さすとかいふ如き生優しいものではなく、之を仰げば只凄じい、恐しい、不安にならざるを得ない底のものであつた。(同上書)^⑦

夕焼けは不気味だった。それを目にした直後、当夜の月明を願望する、——それも分らないではない。が、何かが抵抗させる。「今夜はいい月夜なんだ」の方が自然だ。それは「入日さし」(入日がさしている)を前提にしていることに気づく。

(イ) 入日がさしているので(素晴らしい夕焼けなので) ↓月明なので。
のだ。

(ロ) 入日がさしているので(不安な夕焼けなので) ↓月明であつてくれ。

(イ)の順接(…ので)は自然。(ロ)は、むしろ逆接の「入日がさしているけれども、不安な夕焼けだけれども」の方が適当に思われる。も一つのことに気づく。——連用形に続く「結果」に傾向がある。七一(大和恋ひ↓寝らえぬ)、三三四一(歎きこひのみ↓幸くあり)、一四一(引き結び↓ま幸きくあり)、二七〇二(水行き増さり↓いや

日けに増さる、二七二六（浪立ち↓なき名を負ふ）、二二一（苔むさず↓常なり）

結果は状態語の場合が多い。次の場合も同様。

春の野に霞たなびきうら悲しこの夕影に鶯鳴くも（四二九〇 家持）

うらうらに照れる春日に雲雀あがり心悲しも独りし思へば（四二九二 同）

四二九二歌は、普通ならば、「雲雀あがり↓心嬉し」となるところ。そうならなかったところに家持の悲哀があった。

三

大野氏の論点(2)に「仮にこそ」が挙がっていた。それを軽視すべきでない、——これが沢瀉氏の意見だ。たしかに「明けくこそ」「まさやくこそ」に類する下略形は存在しない。が、それに比例するものに沢瀉氏は着目した。

わが大君天知らさむと思はねばおほにそ見ける和束柚山（四七

六 家持）

おろかにそ吾は思ひしをふの浦のあり磯のめぐり見れど飽かず

けり（四〇四九 田部福麿）

これらは例の「仮にこそ」に比例する。更に、

伊香保嶺に雷な鳴りそね吾が上には故はなけども子らによりて

そ、（三四二一）

この下略は、先のコソの下略九例に比例する。

類推を更に進めたい。

うちなびく春みましゆは夏草の茂くはあれど今日の楽しさ（一

七五三 高橋虫麿）

わが行きは久にはあらじ夢のわだ瀬にはならずて淵にしありこそ（三三五 旅人）

「茂くは」「久には」は、それぞれ「明けくこそ」「まさやかにこそ」に対比する。

生けるもの遂にも死ぬるものにあれば今生なる間は楽しくをあらな（七四九 旅人）

見れど飽かずいませし君が黄葉の移りい行けば悲しくもあるか（四五九 余明軍）

風まじり雨降る夜の 雨まじり雪降る夜は すべもなく寒くし、あれば…（八九二 憶良）

これらのヲ・モ・シは、強めに投入されたもの。次の場合のように、完全にコソと比例している。

あらかじめ人言繁しかくしあらばしゑやわが脊子奥もいかにあらめ（六五九 大伴坂上郎女）

蓮葉はかくこそあるもの意吉麿が家なるものは芋の葉にあらし（三八二六 長意吉麿）

以上の場合、ほとんど、当の助詞の後にアリが接続していることを、よくよく注意してほしい。

恋ひ恋ひて逢へる時だに愛はしきこと尽くしてよ長くと思はば（六六一 大伴坂上郎女）一〇四三・三三三四、同趣

これは「長くあらむ」に類する下略である。

ま幸くと言ひてしものを白雲の立ちたなびくと聞けば悲しも（三九五八 家持）

絶ゆと言はばわびしみせむと焼大刀のへつかふことはさきくや吾が君（六四一 娘子）

それぞれ「まさきくあらむ」「さきくやある」などが下略されている

る。一番簡単で、定式化したアリの類いだ。省略されても有無はない。むしろ略されて意が強まる。主題歌の場合も全く同じ。「あきらけくこそあれ」の下略に相違ない。

四

さて、「清明こそ」が下略だった時、沢瀉氏に提言がある。

ゾにしても、コソにしても、下略といふ事は必ずそこに定まった言葉を補って訳すべきものではない。それは結びと云てよいものがある。「あなたこそ」といふ言葉は、「どうぞお先へ」と云はれた場合ならば、「あなたこそお先へ」といふ下略が明瞭であるが、もっと複雑な「あなたこそ」があるので、「私こそ何ですって」と聞き返へされて、「存じませんワ。御自分で胸に手をあてて考へてごらんなさいナ」といふ事にもなるのだし、又云った当人も適当な言葉が見つからなくて、はじめからそれで止めるつもりで、「あなたこそ」といふ場合もあるのである。今は月光のさやかに照らす事には違ひないが、やはり正確な言葉は定め難い。(同氏注釈)

私はそうは思わない。それと指示しなくても、それが明瞭な場合に下略が行なわれる。前文とか、雰囲気とか、また言葉のお定まりとかで。主題歌の「清明コソ」は、そのお定まりに匹敵しよう。たとえば、

わが脊子し遂げむといはば人言は繁くありとも出でて逢はまし
を(五三九 高田女王)

「繁くありとも」が、全く同義で次のように使用されている。

人言は夏野の草の繁くとも妹と吾とし携はり寝ば(一九八三)
シゲクアリの中間へコソが投入され、シゲクコソアレ。これが下

略されたなら、最も自然にシゲクコソが成立する。コソの投入によって、更にアレの下略によって、文意は二倍、三倍に強調される。「清明こそ」はまさにそれだ。

五

森重氏の主題歌解は先にあらまし紹介した。ここにはコソに関して若干を追記する。

作者は豊旗雲の入日において——よってではない——今夜の月夜の清明を直ちに事実として持ったのである。「——コソ」は「——コソアラメ」の下略ではない。「清明」をいかに訓ずるにしても、ともかくその連用形を承けて直ちに完結する力をもった終止としての係助詞である。……上句を終る連用形において上句の内容たる入日の光景が真に自覚せられ、自覚せられることがすなはちまたおのづから一つの直観として、事実としての下句を指向し現成したのである。このやうな句と句との関係は、言語の表現がなしうるかぎりにおいて、生の究極所をそれこそ言語道断の形においてあらはにしてゐる。(森重氏「序詞句格補説」)

この説を沢瀉氏は「烈しい」と評す。しかし、賛同的だ。コソについて「結びといつてよいものがある」の一言は賛同の一端だ。

雷同者が続く。その一、二氏を挙げる。

この一首における上三句の働きと結句の「こそ」について、きわめて有効な発言をおこなって、これらの問題に決着をつけたのが森重敏氏であった。(「万葉集を学ぶ」(一)吉井巖氏「中大兄三山歌」)

コソ ここでは断定の終助詞。(集成本清水氏解)⑧

借問したい。断定の終助詞、——これの所属例は一五歌以外に一つでもあったでしょうか？

森重氏自身は「終止の係助詞」と呼んでいた。もともと下略があったことを意味していよう。それはアレだ。思うに、森重氏は赤彦を師表に立てるべきだった。

赤彦の断定説はアレの下略だ。願望のコソとて、本来はセメの下略だった。

たとえば、「恋ふ」（恋いこがれる）は、同義で「恋ひスル」として用いられる（二三七五…）。スル（為する）の部分が前後関係で次のように変化する。三二六二「恋ひスレば」（恋いこがれれば）、二四四五「恋ひせしむるは」（恋いこがれさせるのは）。

同様にして、——「嘆かむ」（嘆くであろう）が、同義で「嘆きセむ」（三二三三）。一三八三「嘆きセば」（嘆きをするならば）。

このような使用法は枚挙にいとまがない。やはり定式の措辞なのだ。

以下、ここでの要点を言う。

逢ひ難き君に逢へる夜ほととぎすあだし時ゆは今こそ鳴かめ

（一九四七）

このコソは「今」の強調に利かされている。もしそれを除くと、この「鳴かむ」は「鳴くがいい」の意。「嘆かむ」↓「嘆きセむ」の方式にならば、「鳴きセむ」も「鳴くがいい」の意。これを強調すれば、「鳴きこそせめ」（鳴くがいいよ）。セム・セメなどは定式化してい、下略に付されて「鳴きこそ」（鳴くがいいよ）が成立する。これが願望の終助詞の素性だ。

以上、成立の類似する「清明こそ」^{あきらく}解明の参考に述べた。意の通じかねたことを怖れる。

注①③ 本稿の「入日さし」四、参照。

② 論考は「短歌研究」昭和一〇年一月号。後に「万葉集の総合研究」第一輯・「万葉の歌境」に収録。文中の「雅澄」は「万葉集古義」の著者。

④ 沢瀉氏「万葉古径」(一)所収「清明」攷(昭14)

⑤ この論考は「国文学 解釈と鑑賞」昭和三〇—三一年連載。後、摘要を日本古典文学大系(一)に採録。ここには大系から。

⑥ 九例の内、(6) (三二一六歌)を除く。

⑦ も一つの証言を追記する。

日は生駒に落ちてしまつて、法隆寺の塔がかすかに夕霧の中に見えた。夕焼けの空は半天を焦くほどに燃えて、今にも大あらしが襲うて来るかと思はれるほどに雲はちぎれちぎれに飛ばされてゐた。(吉田弦二郎氏「わが旅の記」草に花あり)

⑧ その他の支持者は列挙にとどめる。

伊藤博氏(古代和歌史研究(三)・全注)・有斐閣新書本坂下氏解・学燈社「万葉集必携」青木生子氏説

その時・所・人

—

長塚節氏は一五歌を秋の詠と受けとった。

季は明瞭に指示してない。指示してないが、豊旗雲の歌の如きはどうしても秋の感じで……。〔馬酔木〕一二号「歌の季に就いて」明37

次に土田耕平氏が、一五歌を思い描きながら述べている。

今年、私は偶然にも播州の一隅に居を占めるを得て、年長く

思いを走らせてゐた自然に日夕対してゐる。春夏をすごして、秋も十月に入ったら、あの壮大な夕暮をしばしば見得るであらうと、ひそかに待ち受ける心地である。(遺稿集(一)「遅筆抄」播州の夕日) 昭2

次に窪田空穂氏の一五歌注で、

海上の快晴の夕日に對して、今夜の月の明らからであらうことを、想像されたもので、雲の状態と、月を待たれることで、おのづから秋といふことが思はれる。(同氏評釈) 昭18

所詠時を秋とすると、従来の通説がぐらつく。齊明七年正月六、七日、播磨は加古の海岸で一歌は歌われたと考えられていた。それは陰暦で、寒々した季節、寒々した月輪でなければならぬ。ところが、一五歌そのものは明るくて、ほがらかで、秋のさわやかな月明を予想させる。わが赤彦先生も秋を考えていたのでなかったか？土田氏は右の文中で述べている。

夕焼けの美観は、地勢や空氣の外に、雲の豊富なことが大切な条件であらう。

いや、空氣が一番だ、と、私は考えた。澄んだ空氣を透して夕焼けは鮮やかである。遠近の山々が接近して見えるのもそれだ。そうした思いを習作に托した。

おほどけき山の姿か目路の限りつらなりつつも間近く迫り来

(自歌集「流燈」小夜) 昭26

更に、例証を古今の歌文に探した。十例に及んだことを先に一言した。一、二を追記しようか。

十月になった。さびしい風が裏の森を鳴らして、空の色は深く碧く、日の光は透通って射渡って、夕の影が濃くあたりを隈どるやうになった。(田山花袋「蒲団」)

北海道は秋も深くなりました。……日によりますと、あたりの山々が浮き上がったかと思はれる位空が美しい時があります。(有島武郎「生れ出づる悩み」)

空氣の清澄が第一の条件だ。その時、夕焼けは絶頂に達し、月明を約束しないではおかぬ。

空の夕焼けが毎日つづいた。けれどもそれはつい二、三週間前までのやうな灼け爛れた真赤な空ではなかった。底には深く快活な黄色を匿して、うはべだけが紅であった。明日の暑さで威嚇する夕焼けではなく、明日の快晴を約束する夕栄えであった。西北の空にあたって、ごく近くの或る丘の凹みの間から富士山がその真白な頂だけを現して、夕映えのなかでくつきりと光って居た……。 (佐藤春夫「田園の憂鬱」)

二

一五歌には左注が加えられてい、問題を誘い出している。

此の御歌は注の如く、反歌とは見えず。(代匠記)

三山歌の反歌にあらざる事左注に云へる如し。思ふに題辭のおちたるなるべし。(井上氏新考) 山田氏講義・全釈など

ただし、題詞まで無視しかね、次のようなところが通念になり、現代に及んでいる。

此一首は、同じ度に印南の海辺にてよみましつらん故に、右に次で載しなるべし。下に類あり。(考) 略解・古義……

一五歌の秋季を否定する方向づけをした最初は土屋氏だった。

御歌からして播磨にての作なることも知られる。或は齊明天皇七年の行幸の折の作かと思はれる。(同氏私注)
これを決定的にしたのは吉永氏だ。

通説では、反歌に「印南国原」が読まれているので、播磨の国にあって作られたとしているが、皇太子が播磨に出かけている形跡はない。後に天皇になっている皇太子のことであるから、播磨に出かけた事実があるとするならば、当然風土記などの記事にするはずであるのに、それらしい記事もないのである。(以下、同氏「天智天皇」^①)

風土記にまんざららないではない。それには後に触れることにして、吉永氏から引用を続ける。

どうしても播磨に関係のあるところで作られたとするためには、私のようにかんがえるより外にないであろう。(同書)

それは、斉明天皇七年一月六日、天皇を始め、中大兄・大海人皇子以下、大挙して九州へ下っている。新羅・唐の合併軍に攻略されつつある百済救援のためであった。

八日にはすでに備前(岡山県)の大伯の海にあったので、七日には播磨灘にかかっていたことになる。^②

吉永氏は推定した、一三、一四歌は船上から播州平野を望見しながら作ったのだ、と。続いて一五歌の推論に及び、

この歌も同じく海上での作かという、それには別の不都合が生じるのである。というのは、播磨の海上にあったの作とすると、当然一月七日の夜でなければならないのである。旧暦七日の月は大体半分の三分の二程度である。とすれば、「清明」をたとえどのように読むにしても、この七日の月に向かって、あかあかと照ってほしいなどとはとても言えないのではなからうか。また、七日の月は夕方はすでに中天にかかっているのであるから、それを未来にかけて「今宵」の月夜というのも変である。したがって反歌から離して考えるのが、一番おだやかな方

法と言えるのである。(同書)

三

吉永氏は一五歌を三山歌から離した。しかも斉明七年以外を認めない。従って、西下途上の或る港における所詠とする。いわく、

斉明七年、西征する大船団を率いた皇太子は、夜、どこかの港を出帆しようとして、夜の航行に必要な月明を願った、と解するのである。

後年、吉永氏は更に一步前進した。

あるいは、前にも引用した熟田津で作られている額田王の歌と同じ日に作られたものであるかもしれない。もちろん排列とは逆に中大兄の歌が夕方に作られ、額田王の歌は待望の月の出を待っての作ということになろう。「入日さし」と「清明」と

同氏「万葉―通説を疑う」に収録

額田王の歌というのは、

熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな

(八歌)

播磨以西で、ただ「どこかの港」というよりも、熟田津と指定した方がふさわしい。それを松田氏は信じて疑わない。

八歌が斉明女帝西征の折、熟田津から出船の直前に成立してゐること、さうすれば、御船が伊予熟田津石湯行宮に泊つた正月十四日以後であると考へられ、出航が正月十六日夕方と推定されるので、一五歌が出来て、数時間過ぎ、一行は出航の準備を整へながら月の出を待つ。やがて待った明るい大きな月が出、潮もほどよく満ちて来た。誰もが出航に最適な条件のかなへられたことを知る。この時、一行中にあつた額田王によって八歌

が作られたと見た。(同氏「原万葉集の成立と資料推定」)

説の当否は別として、右の日次は訂正が必要だ。一行の熟田津着は正月十四日。九州到着が三月二十五日だから、熟田津出発は三月中旬以後でなければならない。

以上、一五歌を斉明七年に関係づける立場に当たった。「秋」を念頭に置かない向きだった。

四

万葉歌の理解・鑑賞に当たって、守るべき原則がある。まず第一に、歌そのものに聞かなければならない。次に、題詞・標目を重んじること。

その次に、配列を無視してはならない。主題歌でいえば、九—一二歌の斉明四年は決定的。すると、一三—一五歌の成立は、

あるひは六六一年正月、斉明天皇西征の時であつたかも知れない。がもう少し遡つた、ある年の夏から秋へかけての時であつたやうにも思はれる。(都筑氏「万葉集十三人」)

都筑氏の着想は素晴らしい。まず一歌に「秋」を聞きつけた。従つて、時は斉明五、六年に落ち着く。

そんな可能性はない、と吉永氏は明言した。可能性の気配が風土記にないでもない。備中逸文風土記の「二万の郷」に、

臣、去る寛平五年、備中の介に任せられき。彼の国、下道の郡に迹磨^{にま}の郷あり。ここに彼の国の風土記を見るに、斉明天皇の六年、大唐の將軍蘇定方、新羅の軍を率ゐて、百済を伐ちき。百済、使を遣はして救ひを乞ひき。天皇、筑紫に行幸まして救ひの兵を出さむとし給ひき。時に、天智天皇、皇太子とましまして、政を摂ね給ひき。行路につきて下道の郡に宿り給ひ、一

郷の戸邑の甚だ盛りなるを見給ひき。天皇、詔を下して試みにこの郷の軍士を徴し給ひしに、すなはち勝れたる兵二万人を得給ひき。天皇いたく悦び給ひて、この邑に名づけて二万の郷といひ給ひき。後に改めて迹磨といふ。その後、天皇、筑紫の行宮に崩り給ひ、終にこの軍を遣らざりき。(本朝文粹(二)三善清行意見封事)岩波文庫本「風土記」による

この記録に着目した人が一人いる。山崎良幸氏だ。もともとこの地は、軍船を調えるのに格好の地であつたやうに思われる……。この地で徴発される兵士と共に、兵士を乗せる軍船の調整が可能であつたろうことを考えてもよいのかも知れないのである。(同氏万葉歌人の研究)

山崎氏の推定は、——当の現地は備前の児島半島下津井あたり、日次は斉明七年正月十、十一日ころ。……これだと、日没前に、すでに月は出ている。第一、「秋」を無視してしまつてゐる。

本格的な出勤は斉明七年正月だった。その前年、あるいは前々年の夏秋の候に、出勤準備のために、中大兄が山陽道筋を西下したことはあり得ないことではない。その折り、一三、四歌が生まれ、ほとんど同じ時、同じ所で一五歌が生れたに相違ない。

五

左注の「反歌に似ず」から、一五歌の作者も中大兄とは限られなくなつた。

題辞のおちたるなるべければ、中大兄の御歌とだに定むべからず。(井上氏新考)

この二首(一四・一五歌)は、後世の或人、たとへば高市黒人の様な人が、播州の旅行中に作つた歌を、三山歌の縁で、竄

入したのであらう。(折口氏口訳)

その後、このような唐突な説は出なかった。ところが近時、中西氏が新見を提唱した。氏は例歌として、二、三―四、一三―一五、一七―一九、四八五―四八七の諸歌を挙げ、次のように共通性を指摘する。

長歌(ある歌では第一反歌まで)は形式的・公的そして儀礼的であつて古朴であり、反歌(ある歌では第二反歌のみ、また和歌)は抒情的・私的であつて、連続性が薄い。そして長歌は近江下向の歌のごとく「御歌」とまぎれ、三山歌のごとく作者を疑わせる。

……三山歌の古拙な物語叙述も、多分に非個性的な公的な場での詠誦をおもわせる。ただこの場合の三山歌長歌の作者が誰であつたかは、未だに明らかにしがたい。(万葉史の研究)

右の公的・私的の対比は信じがたい。題詞の作者名に替えて、別の実作者を安易に立てることは最も賛し難い。

以上は、次の結論を否定するため多辯を浪費した。

三山歌の実作者は名が没して中大兄のみが残り、それに伴つたらう額田王の一首も事情を埋めて一連としてとどめられている。(中西氏同上書)

さて、中西説を支援するのは伊藤氏である。

一五番歌は三山歌の「反歌」ではないのであらう。古くはこの種のものも「反歌」と称したという考えに立つなら別だが、これは本質は「和歌」(和の歌)と見るべきであらう。「和歌」とみると、こういう形はそっくりそのまま一七―一九にある。一七―一八が額田王の作で、一九がそれにあわせた井戸王の「和歌」だった。

「和歌」であれば、一五は当然別人の作である。ならばその作者は誰か。中西進氏(万葉史の研究)はいわれる。額田王であらうと。まったく同感だ。(同氏「遊宴の花」) 古代和歌史研究

(三) 所収

一九歌は一七―一八歌の完全な和歌である。一五歌は和歌らしい気配もなく、作者として別人を予想させはしない。次の推論はうかがって置くだけにする。

新羅遠征途上、斉明・中大兄・大海人ら首脳陣の周辺にあつて、これだけの歌を和しうる歌人は額田王を措いては誰もいない。これはあきらかに御言持ち歌人の晴れの歌だ。とすると、一五番歌は額田王の作にちがいないが、正式には総帥斉明女帝のことばとして和せられたと見るのが穏当であらう。「今夜の月夜さやけくありこそ」の絶対確信の事実は、皇太子序歌(一三―一四)に対する天皇決断の常としていっそうふさわしい。(同書)

六④

最後に臨んで、いささか結びの言葉を述べたい。

幾昔か前になるが、田辺幸雄氏の天智歌評に驚いた。

言ってみるならば、一つの余裕派の態度である。……ディオニソスの色彩が極く乏しい。ではその反面に、整った調和を崩すものが寸分もない、磨きあげた端正な美しさに輝くもの、いわばアポロンのということばに適わしいものがあるか、というに必ずしもそうではないのである。(同氏「初期万葉の世界」)

おやおや、と思った。最高の意味においてアポロンのでないか。調和がとれ、端正で、美しさに輝いている。初期万葉の光輝はここに極まっている。

よく言えば、中庸の道を歩んで居り、その背後に温雅なもの、常識的なもの、時には感傷的なもの、がつき随っている。もう一度一般的な言い方をするならば、それは人麻呂、赤人には遠く、家持にやや近いものである。(同書)

これは噴飯ものだ。
わたつみの豊旗雲に入日さし今夜の月夜明^{あき}らけくこそ(一五)
(海上の見事な横雲に夕陽が今さしているのだから、今夜の月夜はさやかなんだ。)

景と情とが見事に融合し、よろこびに心は躍っている。自然と人間は一体に化している。こうした世界がわが古代にあった。これは驚きであり、狂喜に値する。

熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな
(八 額田王)

配列を無視してはならぬ。西征に関係しない。斉明三年前後、額田・大海人・十市の一家が水入らずで船遊びした至幸なひとこまだ。歓喜に溢れている。明るさは一五歌に勝るとも劣らない。

春過ぎて夏来たるらし白妙の衣干したり天の香具山(二八 持統天皇)

(春が過ぎて夏がやって来るらしい。白い衣類が乾されたさまでそれが分かる。そうした爽やかな気配の香具山なのだ。)

季節の微妙な推移を前に、心は躍っている。これといい、一五歌といい、叙景以上の叙景である。それが時代と共に衰微して行く。でも、死滅したのではない。

雨やみて清く照りたるこの月夜また更にして雲なたなびき(一五六 家持)

(雨がやんで、さやかに照っているこの月夜だ。なおいつそう照

り輝いて、雲よ、たなびいたりするな。)それにしても、初期の明るさは満点だ。情愛の面でも、より至純である。

君が代も吾が代も知るれや岩代の岡の草根をいぎ結びてな(一中皇命)

(あなたの寿命も、私の寿命も、先のことは知れはしませんね。ですから岩代の岡の草を、さあ、結びましょうよ。)

こうした珠玉は枚挙にいとまがない。それに較べて、叙景の歌数は少ない。少ない中の絶頂が一五歌でなければならぬ。

古代人たちこそ生きていた。自然もまた限りなく生きていた。万葉歌は枯死した遺物ではない。私たちを励まし、慰めてくれる。まさに福音である。その純真にふれ、救われるのは私たちだ。

最後に、これを肝に銘じたい。万葉は美しい。深い。こちらの理解が到らないのに、けちを付けるような卑しい真似はすまい。

注① 同氏「古典とその時代」に収録。初稿は、「渡津海の豊旗雲」の

歌の解釈を通して「解釈と鑑賞」昭和三十一年一〇月号

② 同解は、——久米氏「時代と作品」・稲岡氏鑑賞「日本の古典」

(二)・北山氏「万葉集とその世紀」・坂下氏初期万葉

③ 桜井満氏は一五歌を西征に関係づけることに反対し、

もしそのおりの歌だとすれば、額田王の「熟田津の」(八)という名高い歌の機会と同じになる。しかし、ともに巻一の内収録されながら、間に温泉行事のときの歌(九—一二)が入っているところを見ると、別の機会の歌とみるべきかと思われる。日本書紀の記録だけが西下のすべてではないはずだ。(同氏「万葉集の風土」)

八歌は斉明三年前後の産だ。そのことは上田女子短期大学紀要

- ④ 一三号の拙稿「若き日の額田王」を参看願いたい。
この項の引歌の私解は拙著「万葉省察」(一)(二)(三)に詳述した。